第1章 聖堂の中

正教の人々は同じように教会を建てますが、正教ではそれを「聖堂」とも呼びます。聖 フェリシティ聖堂を見学して、その中で区分されたエリアを廻りながら、それぞれにどん な役割があるのかを知りましょう。

私たちは入口すぐにある啓蒙所と信徒が祈祷する聖所、そして聖所の前方にあるスクリーンのようなイコノスタシスとその奥にある至聖所を覗いてみましょう。時々、立ち止まってイコンをもって祈祷することや十字を描くなど、実践的な内容について説明します。また「聖人への祈祷」、「贖い」、「セオーシス(神成)」、「生神女マリアの位置」などの考え方にも少し触れていこうと思います。こういった考え方や実践の姿が正教会の営みに深くなじむ基礎となります。

1 主の門に入れ(詩篇 99:4/聖詠 100:4)

~啓蒙所・イコンで祈ること・イコンに拝すること・十字を描くこと~

平日の朝の聖フェリシティ教会に立ち寄りましょう。この時間は何の祈祷も行われてい ない静かな時です。中央のドアを開けて入ると、まず啓蒙所(けいもうしょ)という、さほど 広くない場所に立ちます。掲示板、会報、忘れ物の傘、募金箱、修養会や集会のポスターなど、ここにはどこの教会の入口でも見受けられるものが並んでいます。正教会のこのスペースには更に置いてある物があります。来会者が点灯するためのロウソク、これはほとんどの教会で蜜蝋(みつろう)製の長細いロウソクですが、教会によってはグラスに入れるタイプの玉ロウソクもあります。ロウソクの辺りに献金箱があるかもしれません。ロウソクの値段を聞いたり、祈祷中なのにそこで両替したりする様子を見た人は驚くかもしれません。教会によっては紙が置いてあって、祈祷の中で祈ってもらいたい人の名前を記入します。(生者用と死者用に分かれています。)

そのような啓蒙所ですが、単なる入口の広間ではありません。ここも祈祷する空間の一つで、祈祷の中でも特に重大な祈祷の備えをするための祈祷を行うためにこの空間が伝統に使われてきました。例えば婚配式(結婚式)の開始前、司祭はここで新郎新婦と顔を合わせ、彼らが自らの意志でここに来たか、他に約束している相手がいないかを確認します。また洗礼式の前に、洗礼を行う準備の祈祷が行われます。最近はこの類(たぐい)の祈祷を聖堂の中央で行っている教会もありますが、もしかしたら伝統に則った啓蒙所で行う祈祷に立ち会うかもしれません。

お祈りに来た人はまず、ロウソクを手にして啓蒙所のイコンの前で祈ります。心の中で 挨拶と彼らの思いの言葉を投げかけています。正教会における習慣はまずイコンの前に立 ち止まって祈り、そこに燭台があれば、ロウソクに火を灯して離れます。

人によっては、これを偶像崇拝だと思うかもしれません。偶像崇拝だと思っている人は、 実はあなたが初めてではありません。イコンの意義をまとめるのは百年を超える時間とイ コンを守ろうとする何百人もの人々の命が費やされました。詳しくは 1 章 8 節で解説しよ うと思いますが、イコンの話題が出てきたら、その都度疑問に答えながらイコンの役割を 学んでいきたいと思います。

まず、「イコン」というのは正教のキリスト教徒が愛情や親しみをもっている画像だということを心に留めておくのがよいでしょう。おそらくあなたもこの世を去った自分の愛する人の写真は持っていると思います。きれいなフレームに入れて家の棚に飾ってあるかもしれません。写真を見ればいつだってその人に思いを馳(は)せるでしょう。今は神のもとで生きていることに感謝し、自分のために祈っていてくれていると信じています。

もし愛する人の写真に対する思いが想像できるなら、イコンも写真のような役目を担っていて、正教徒はイコンに描かれた聖人をそのような思いで見ているということが理解できると思います。イコンは決して崇拝の対象ではありません。私たちはイコン自体を拝んでいるのではないのです。また、イコンを通じた特別な儀式や、イコンによって霊性の違いもありません。イコンは私たちがこの目で見たことがない「雲のように取り巻く証人(ヘブル/エウレイ 12:1)」が、私たちと一緒にいてくれているような感じです。それは私たちが祈っているいないに関わらないのです。イコンは、あなたのお気に入りの聖書と同じ

く、大切にするものです。革張り聖書、金箔の縁どり聖書、二色刷り聖書、いろいろありますが、それらは当然聖書の原本ではありません。もしあなたが自分の聖書を失くしてしまったとしても、「聖書」は存在します。つまり、手元の聖書は聖書の原本の写しだと知りつつそれを大切にしています。馴染みあるお気に入りの聖書は、おそらくあなたの敬愛を得ているでしょう。それを拝みませんが、いつも大切にしていると思います。なぜなら、聖書が神と向き合う場だと思っているからです。「天国への窓」と言われるイコンも同様です。

キリスト教徒は初代から信仰について視覚的芸術を用いてきました。ほとんどのキリスト教徒が文字を読むことができなかった何世紀もの間、聖書やキリスト教史に登場する人々や出来事を描き表した絵は大変貴重なものでした。聖堂の壁を聖書などの登場人物や出来事や救いの歴史で満たして、まるで子供向けの聖書絵本のようにしたのです。その時代は手で全て書き写されていたので、聖書はとてつもなく高価でした。考えてみてください、今あなたが手書きの聖書を書家に一冊注文したら一体いくらになるか。当時もひとつの教会が手に入れられる手書き聖書の数は一冊か二冊です。したがって信者たちはみな大きな声で拝読される聖書を聴くことしかできなかったのです。もし拝読された聖書の行(くだり)を思い出したくなったら、聖堂に行って壁の絵を見るのです。(宣教師たちも言語の壁を乗り越えて聖書の内容を伝えるために、携帯用イコンが便利だと思っているようです。)

そのため、よくイコンを「描く」と言わず「書く」と言います。(実は原語であるギリシア語にはその様な語彙の違いは発生しません。)ほとんどのイコンには作者のサインはありません。もしサインされるとしたら、作者名に続けて「の手による」という句を添えます。これは、そのイコンはその共同体の一致した祈りが書き手に伝わって出来た作品であるということを意味するからです。

そもそもロウソクはどうして灯されるのでしょう?それは、キリストが光であることを 私達に思い起こさせるためです。…夕方の礼拝、晩課に行くと、非常に古い時代から歌わ れている聖歌を歌う中でランプが灯される場に立ち会うことができます。その聖歌には「聖 (せい)にして福(ふく)たる常生(じょうせい)なる天の父の光栄なる穏(おだ)やかなる光、イ イスス・ハリストスや」という一節があります。

また、ロウソクを灯すことには実用的な理由もあります。電気が発明されるまでの何世紀もの間、教会の中は真っ暗でした。イコンの前にロウソクの光を灯すと、暗闇の中に敬愛(けいあい)する人々の顔が照らし出されるのです。ロウソクが暗闇を照らし、目に見えていなくても存在するものがあるという現実を私達に気づかせてくれます。そして、この世を生きてきた全ての聖人が、今ここで生きて共に祈っているのだと。ロウソクの実用的意味合いは薄れましたが、現代でもこの伝統は続けられています。まるで、「我が家の夕食の時間はなぜか必ずロウソクを灯すのよ」、という家のならわしのように。これは敬愛の印と

言える作法でしょう。

この啓蒙所(けいもうしょ)あるいは聖所(せいしょ)の中には、その聖堂が頂いている名前を示すイコンがあるかと思います。主の升天(しょうてん)聖堂なら、その聖堂には主が天に昇られている場面を描いたイコンがあるということです。聖パウロ/パウエル聖堂ならば、その教会の庇護者(ひごしゃ)である聖パウロ/パウエルのイコンがあります。英語の場合、正教会では St. Paul であり、西方教会のように St. Paul's とは表記しません。)

そういった画像の中には、困惑するものもあるでしょう。例えば至聖三者(三位一体) 聖堂では、アブラハムとサラが三人の天使に仕えていて、あなた方に息子が生まれると言 われるシーンが描かれているイコンです。また復活聖堂という名前の教会には、いわゆる 園の奥に見える空の墓ではなく、ハリストスが地獄の洞の上に立って虜となっている人々 を救い出している絵が描かれたイコンがあります。聖十字架聖堂のイコンは、ハリストス が十字架にかかっている場面の絵ではなく、祭司のような衣をまとった人が、集まった人々 の真ん中に立って十字架高く掲げている、教会史上の出来事を示したものです。このイコ ン前方に描かれているのは、コンスタンティヌス大帝の母である聖エレナ(ヘレン)で、 エルサレムのビーナス神殿の地面の下からキリストが架けられた十字架を発見した人です。 主の十字架は約3世紀の間、地中に埋まっていたということです。

イコンは私達に物語を伝え、神学を教えます。文学では表現しきれないことまで、イコ ンは端的に伝えます。神学を教示するということには大変な責任が伴いますから、イコン は形式や内容は標準化されたパターンに従って書かれます。例えばキリストの変容(へんよう)のイコンひとつをとっても、その登場人物から書かれ方まで同じように書かれます。私達には聖書に記された通りの描写以外、画家の個人的な思いをイコンに散りばめるようなことは不要なのです。

現代の芸術家とは異なり、イコン画家は自分の仕事の中に自己表現することを求めません。イコン画家の仕事は時代を超えて歩み続けてきたイコン画家たちの足跡をたどり、自分が受け止めたものを正確に次に渡すことです。彼らの内側から発する神独自の働きが、イコンを通じて誰かに現れたら、イコン画家の役割として十分な価値を持つのです。深い祈りの生活を送り、かつ彼らがイコンを書くときの祈りとその間に行う節制(せっせい)が、書き上がったイコンから光り輝きます。

聖所に入る前には教会の名前に由来するイコンを拝するのがならわしとなっています。「拝する」とはイコンに接吻(せっぷん)することだと、見ていればすぐに気がつくでしょう。接吻は、敬意を表し、栄誉を称え、親愛を表す行為です。正教会の人々が、挨拶として類に接吻し合うように、イコンにも挨拶します。このように正教会の信徒は、日曜日に教会に来ると、まずロウソクを手に取ってその教会のイコンの前に立ち、胸元で十字を書いて(時には深くお辞儀をして)、無言で祈ってからイコンに接吻します。おそらく、書かれている人物の手首や足元を好んで接吻していると思います。聖所にキリストと生(しょう)神女(しんじょ)マリアのイコンがあれば同じようにします。(ちなみに礼拝時の接吻では静かに

行います。軽く唇を当てるだけで音は立てません。子どものような接吻が望まれます。)

子どもが接吻できるよう低いところに置かれたイコンもあるかもしれません。子供たちが一生懸命十字を書いて接吻する様子を、よく大人たちは楽しげに見ています。右手があちこちにいっているのがわかりますね。まるでお遊戯(ゆうぎ)の「あたま、かた、ひざ、あし (Head(ヘッド), Shoulders(ショルダー), Knees(ニー), and(アンド) Toes(トゥー))」を片手でしているかのように。

十字の書き方について、東方のキリスト教徒は右手で額、みぞおち、右肩、左肩の順に触れます。肩の動作は、左から右へと手を移す西方 (カトリック) 教会のそれとは逆です。 私も正教会に移ったとき、「ドアは引くんじゃなくて押すのよ!」という感じで覚え直しました。

キリスト教でも教派によっては、そもそも十字を書くこと自体が中世の迷信の産物なのではないかと違和感を覚えるかと思います。実はこの作法の発生は中世よりもっと古い、ローマ迫害時代にまで遡(さかのぼ)ります。テルトゥリアヌス(西暦 160-225)はキリスト教徒の女性たちにキリスト信仰を持たない男性と結婚することに注意を促しました。「ベッドと自分の体に十字を記したときの相手の反応を見て、場合によっては逃げなさい。」彼は女の夫がそれを見て、妻がキリスト教徒だと気がついたときに、逮捕するか訴えるかの手段を妻に対して取るだろうと忠告しました。この時は酷(ひど)い迫害の時代だったからです。

それにしても興味深いことです。どうして、テルトゥリアヌスは「十字を書くことを止めなさい」とは言わなかったのでしょうか。その答えは単純で、キリストの十字架を書かないことなど、たとえそれが身の安全のためだとしても考えられなかったからです。「わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇(ほこり)とするものは、断じてあってはならない。(ガラティア 6:14)」初期のキリストにとって十字架の印は単なる作法ではなく、イエスキリストの力と臨在(りんざい)をとっさに求めるための手段だったのです。聖アサナシウス/アファナシイ(西暦 320 頃)という人がいました。彼は偽の悪霊の前と、いかさまの予言者と魔術師の前で、「その笑い草の十字架の印とやらをやらせてみて、どんな風に効果があるかをアサナシウスに分からせてやろうじゃないか」と言っている懐疑派の人々を招いて、逆に彼らに知らしめたという話があります。

この十字架の力を信頼して、初代キリスト教徒は十字架を頻繁に書きました。エルサレムの聖キリル(西暦 313-386)はこう言います、「我々の印として、どんな時でも額に十字架を」。つまり、これから食べる食べ物にも飲み物にも、出かける時も帰ってくる時も、寝る前も起き上がる時も、そして何かを行っている最中も、十字架の力を信じて書くということです。

西方教会の人々には、東方教会の人々が事あるたびに一生懸命十字を描いている様子が 印象的なようです。プリゾン・フェローシップ(米国の刑務所制度の改革を訴え、信仰を 土台とする更生活動を目的とする教役者の非営利団体)を設立した伝道師チャールズ コル ソンはこのように言いました。

私は正教会の修道女であるイリナ ラツシンスカヤ(共産党時代に収監された中の生存者)と共に祈った。私は「アーメン」といい、彼女は心を込めて自分に十字を描いていた。その時、私も十字を描きたいという強い衝動に駆られた。しかし、南部バプテスト派の法に背くのではないかという恐れが同時に起こり、その気持ちをぐっと抑えた。後になってから、キリスト教徒は初代の頃から既に「我も十字架につけられたり」と十字を描く習慣を持っていたことを知り、自分は何という愚か者かと思った。

カトリックでは 5 本の指をゆるやかに合わせて十字を描きますが、一説によればこれは キリストの5つの苦しみを表現しているとのことです。正教会での描き方はもっとややこ しいです。実は私はこの説明をするのが嫌いです。夫が正教会に移るということで私もつ いていったとき、最初は(不信感も少しあって)こういった事にイライラしました。自分 が学ぶ正教の習慣がいちいち細かいので、凝りすぎで複雑すぎやしないかと思ったのです。 だんだん慣れた頃ひとつ分かったことがあり、それで随分気が楽になりました。それは 正教会では人が何をしているかよりも、むしろ自分がどうするかに意識が向いているとい うことです。よく親しまれている英国人作家 C.S.ルイス(ナルニア王国物語の著者)は正 教会を訪れて、大変気に入ったそうです。「ある人はずっと椅子に座り、またある人はずっ と地面に顔を伏せている。またある人は立ち続け、ある人は膝まずき続けている。更には 歩き続ける人もいて…しかし誰も人がやっていることにケチをつけない。」彼はある書物に そう記しています。

もちろん誰もが祭壇に向かって祈るのですが、皆それぞれに心を込め、敬意を表すそれ ぞれの態度を持っています。あなたが肘を上げ下げしながら十字を描くことを止めたとし ても、誰も気にすることはないでしょう。正教会では祈りの真心を捧げる自分の行為は自 分次第であって、人の目はあまり気にしないのです。

正教会のキリスト教徒が十字を描く手の形は、まず右手の親指と人差し指と中指の先を合わせて至聖三者(三位一体)を表します。これらの指で額、みぞおち、右肩、左肩と触れていきます。残りの 2 本の指は手のひらに折りたたみます。これは手のひらを地面と見立て、神が人となって地に降りたことを意味します。

正教会のご祈祷に参加し始めた頃は、この指の形を瞬時に作ることができなかったので、 お祈りが始まる前から予め右手をこの形に作っておいて、お祈りが終わるまでずっと崩さ ないでいました。今では当たり前になっていますが、その頃はいつまた十字を描くのかと 気が気でありませんでした。

私は十字というのは、一対の本立てのようにご祈祷の最初と最後に描けばいいと思って 育ちました。ところが正教会のキリスト教徒は、四六時中十字を描くのです。

正教会は、聖堂に入ってから出るまで、それこそ祈祷中も頻繁に十字を描きます。十字架 やイコンや福音経に接吻するとき、至聖三者や十字架という言葉が発せられたとき、福音 経拝読の前後、信経(使徒信条)、領聖前の祈祷の間、そして天主経の最後や領聖(ご聖体 を頂く)前後など、とにかくいつでも描きます。教会の外であっても、例えば救急車のサイレンなど、何か祈りを要する音が聞こえたりすると私も十字を描きます。それは「神様、助けてください」という気持ちを届けたいサインでもあります。

私たちは聖堂内を横切るときにも、祭壇への敬意として横切る途中で一旦立ち止まって 十字を描きながら軽く頭を下げます。気がつくと私自身も完全にこうした作法を身につけ て、大きな部屋を横切るときはつい十字を描いてしまいます。映画館へ行ってスクリーン の前を横切るとき、無意識にスクリーンに向かって頭を下げて右手を額にやらないよう気 をつけたいところです。

カトリック教会から来た方は、十字を描く手を聖水に浸すために啓蒙所あたりで聖水を探すのではないかと思います。正教会ではそのための聖水はありません。(私はこれに驚いたのですが)正教会では聖水を撒いたり飲んだりします。聖所内に聖水ポットが置いてあるのを後で見るでしょう。それから鋭い人は気がついているかも知れませんが、よく礼拝所に置かれているはずのものが、この啓蒙所に置かれています。聖歌譜です。どうして礼拝所の後方にある棚や前の椅子の背もたれのポケットではなく、この啓蒙所にあるのでしょうか。それを少し置いておいて次の聖所に入りましょう。